



第 17 号

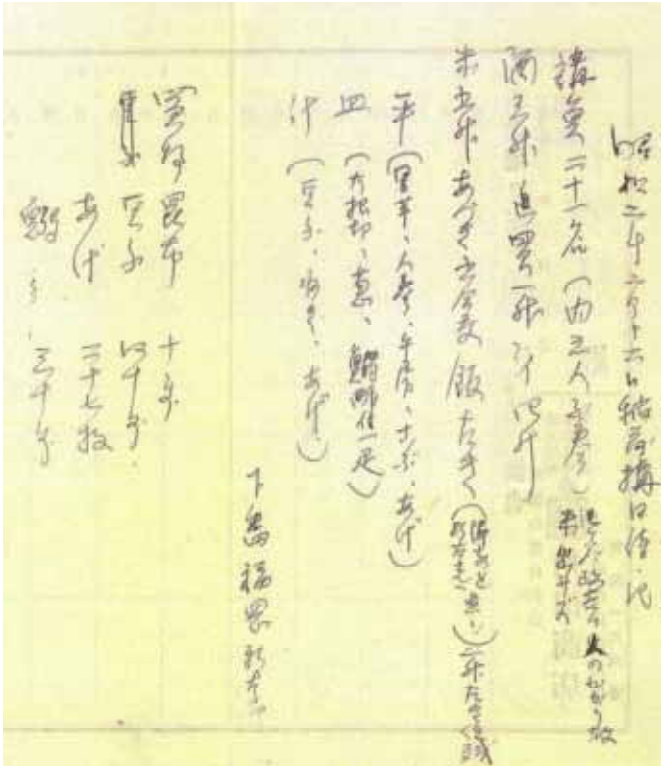
2009年5月30日発行

藤 沢 市 文 書 館

Fujisawa city archives

〒251-0054 藤沢市朝日町12-6

TEL 0466-24-0171 FAX 0466-24-0172



昭和二年二月十六日 稻荷講日待ノ記	
講員二十一名(内三人不参) 池ヶ谷政吉八火のかかり故 米出サズ	
酒三升	追買一升 ケイ四升
米五升	あづき六合交飯たき(隣家と遣し)二升たき位残 新太さんへ
平(里芋、人参、牛房、こぶ、あげ)	
皿(大根切、葱、鰯酢付一疋)	
汁(豆ふ、ねぎ、あげ)	
買物	昆布 十本
	豆ふ 四十本
	あげ 二十七枚
鰯	三十本
	下番 福岡新太郎

稲荷講(いなりこう)での食材の記録(昭和2(1927)年2月16日)

上の記録は、現在の村岡地区の農民の日記に挟まれた領収証の裏に記されていたものです。藤沢での稲荷講は初午(はつうま、2月の最初の午の日)の日に行われるのが通例ですが、日記を付けた農民の集落では、この年是何らかの事情により二の午の前日に開催されました。当日はごちそうとして赤飯が出て、里芋の煮物と鰯の酢漬けがおかずとなり、豆腐と油揚げの味噌汁(もしくは、すまし汁)が付いたものと思われます。当日は話が盛り上がったようで、お酒を3升用意したにもかかわらずなくなってしまい、もう1升追加でお酒を買っているのがわかります。それから、出席者だけでごちそうを食べてしまわない配慮もうかがえます。(中村)

(参考:『藤沢市史』第7巻民俗編の第1章第3節「講集団」および第4章第2節「春・夏の行事」)

目 次	文学にあらわれた藤沢(第1回)..... 3
稲荷講での食材での記録..... 1	連載・古文書の読み方(第17回)..... 4
旅人が見た江戸時代の藤沢(6)..... 2	ミニ事典「江ノ電」・編集後記..... 4

旅人が見た江戸時代の藤沢(6)

- 清河八郎の遊んだ江ノ島 -

前回に引き続いて、清河八郎の見た藤沢・江ノ島についてを見ていきたいと思います。

遊行寺と小栗堂

朝一番で宿を出た八郎は、遊行寺に赴き、本堂や小栗判官の墓、小栗堂などを見物しました。遊行寺の景観については「随分うつくしき寺なり」と書いていますが、遊行上人の廻国については、従^{つき}人が威光を鼻にかけて「諸国々宿々の金銀をむさぼり、(中略)諸人迷惑」していたと、感情的に不満を漏らしています。

江ノ島へ

遊行寺を見物した八郎は、江ノ島道を通って江ノ島に向かいました。前回触れた嵐の前触れか、海岸沿いは波風が荒く、江ノ島へと続く砂州を、裾をからげて渡っています。

まづ入口に鳥井ありて、そのうちに人家百たらず軒をならべ、いづれもうつくしき旅家なり。大山の参詣のころは、群集おびただし

島に入るとまず鳥居があり、それをくぐると百軒ほどもあるかという旅館が軒を連ねていました。それらの旅館についても「いづれもうつくしき」と書いていて、当時の江ノ島の繁盛ぶりがうかがえます。

大山(阿夫利山)参詣が行われる時期には、江ノ島に沢山の人が訪れると記されています。これは、江戸の人々が大山参詣をした帰りに、こぞって江ノ島に立ち寄る習慣があったためです。『東海道中膝栗毛』でも、弥次さんが陸奥国から来た旅人に、「**去年おらが大山へ行った時**」と、知識をひけらかす姿が描かれています。

江ノ島に入った八郎は、下の宮、上の宮、本宮と、順番に江ノ島を回っています。本宮は先年に焼失していて再建途中でしたが、八郎が「**されども奥は薄々成就せり**」と書き残していますので、そろそろ完成間近だったのでしょう。

また本宮にいたるまでの坂には、江ノ島名産の貝細工を売る店が左右に沢山並んでいたとも書いています。

清河八郎の見た岩屋

この日は、先述したように「折あしく波あら」だったので、岩屋には入れなかったのも、稚児ヶ淵辺りの景色のいい茶屋に入って一服しました。

八郎は、嘉永元(1848)年にも江ノ島を訪れているのですが、その時に入った岩屋を思い起こして、

**東に向かひて奥行深く、されども拾五、六間よりうち
は人を入れず。古しへ仁田四郎、富士の抜あなにいたりしといふなり。壹年一度づつ掃除波とて、大波浪岩屋のうちに入りて洗ひさらう也。**

などと書いています。

岩屋には、富士の人穴に繋がっているという伝説がありましたが、15間(27.3m)ほどまでしか、中には入れなかったようです。

また岩屋を年に一度襲ってきて、洗いざらいに運び去ってしまう波を掃除波と呼んでいました。八郎は、この波が岩屋を襲うので、夏から秋にかけては、弁財天像を本宮に移すのだと説明しています。年に一度の掃除波ですが、この年は非常に強い波が岩屋を襲い、「岩屋中損破」してしまったようです。

江ノ島の名物

岩屋を見物した八郎は、江ノ島を離れる前に、午前中にもかかわらず茶店でお酒を飲みました。

茶店にて肴を云付て一杯をくみ、興をなす。いまだ朝のうちなれども、江の島はさかなの名物にて、景色のみにあらず。江戸より多く遊びたる所ゆへ、土地の風を見せん為に、一杯命ずる也

八郎はこの言い訳として、江ノ島は景色が美しいだけでなく、食べ物もまた名物であり、わざわざそれを求めて江戸からも大勢の人が訪れるほどの場所なので、母親に江ノ島の土地柄を見せるために酒を頼んだのだと主張しています。茶店で一杯飲んだ八郎は、そのまま鎌倉へと向かいました。

前の晩はよく眠れなかった八郎でしたが、藤沢・江ノ島は、総じて「うつく」しい印象を与えていたようです。(加藤)

参考文献：清河八郎著小山松勝一郎校『西遊草』岩波書店(岩波文庫、1993)

文学にあらわれた藤沢

第1回 青梅雨(永井龍男)

九時少し前に東京駅を出た湘南電車が、F駅に着いた。その間はほぼ一時間かかる。降りた客は、一昨日からの雨にみんな雨支度をしていた。

国電に接続した江ノ島電車のF駅には鎌倉行きの電車が待っていた。単線電車に相応した屋根の低い古臭い駅である。(下略)

上記は、芥川賞や直木賞の選考委員や鎌倉文学館の初代館長をつとめ、文化勲章を受章した作家、永井龍男(1904～1990)の作品「青梅雨」の一節です。この作品は、事業に失敗し、一家心中を遂げる主人公たちの家族が過ごした、最期の数時間を淡々と描いています。

この作品は『新潮』の昭和40(1965)年9月号に掲載されたものです。この年の経済ニュースとしては、山一証券事件や中小企業の倒産件数が6000件に上ったな

ど、高度成長期の最中とはいえ、暗いニュースが多かったようです。

一方藤沢に目を転じると、さいか屋などの大型店が進出し、藤沢駅周辺としては「ビル・ブーム」が到来したと言われました。その上、柳小路から鵜沼にかけての一带は、別荘地から宅地へと、大きく変化を遂げつつある時期でした。その頃の江ノ電藤沢駅は、国鉄(現JR)と接続されており、現在よりも乗り換えには便利でした。

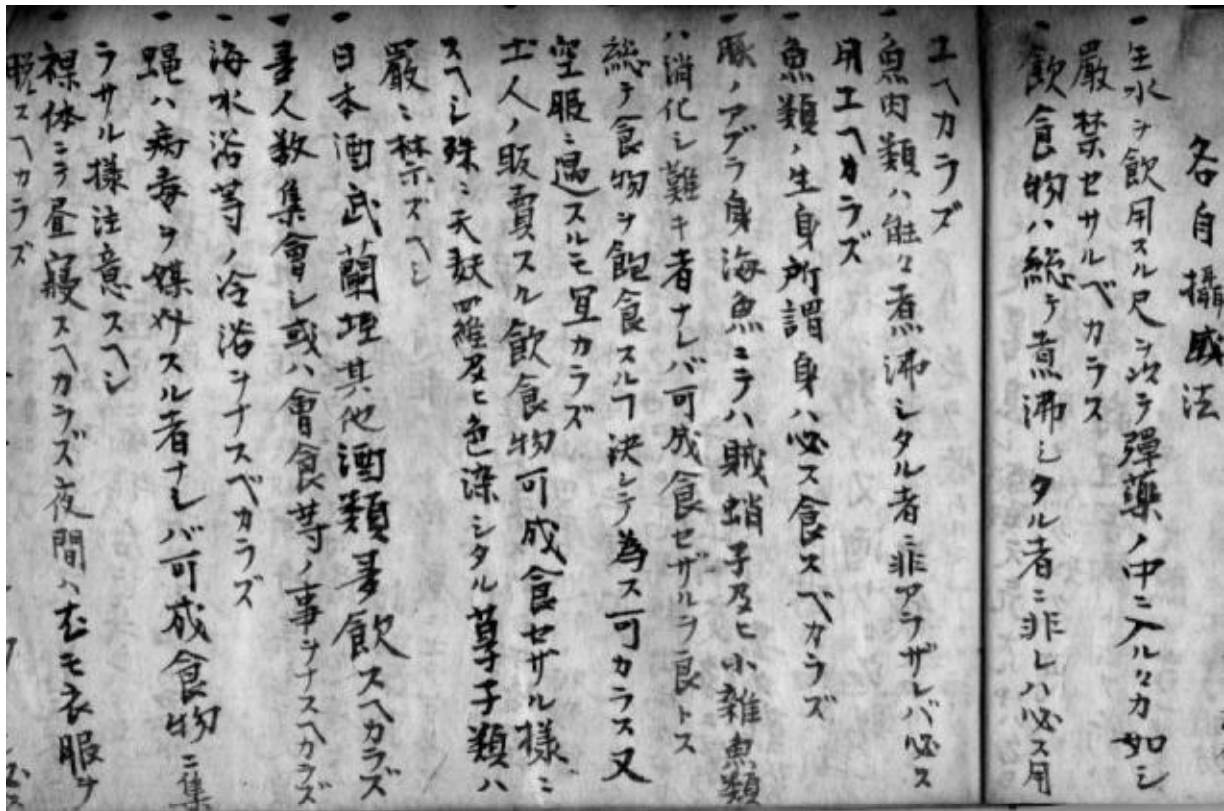
この小説は、当時の新聞記事をヒントにして書かれましたが、藤沢を舞台に設定したのは、作者の創作のようです。雨、単線電車、古臭い駅。一家心中をテーマにした小説には、似合いのシチュエーションだと思います。その技が、永井龍男を「短編小説の名手」と呼ばせたゆえんかもしれません。(伊井)

(永井龍男『青梅雨』は新潮文庫で読めます)



雨の日の江ノ電藤沢駅周辺(昭和40(1965)年頃)

バスターミナルに停まった江ノ電バスに乗るため、傘をさした人々の長い行列ができています。右端の線路が江ノ電の線路で、当時江ノ電藤沢駅は小田急と国鉄(現JR)に近接していました。バスターミナルの南側の建物は洋画専門の映画館「藤沢中央劇場」で、この頃は「サウンド・オブ・ミュージック」などが上映されていましたが、現在は小田急デパートができています。ちなみに写真の手前左下の建物には、今もつづく金物屋さんの名前が見られますが、その後この地には西武デパートが進出し、風景が一変することになりました。



上の資料は、日清戦争で台湾の澎湖(ほうこ)諸島に出征した兵士の日記に記されていた摂生法の一部です。
 【質問】この摂生法の第6か条目で、「日本酒」の次に記された漢字3文字の読み方は何でしょうか？(中村)

ふじさわ地域史ミニ事典「江ノ電(えのでん)」

江ノ電は、日本で6番目の電気鉄道として設立され、明治35(1902)年9月1日藤沢 片瀬(現江ノ島)間を開業、同43年11月に藤沢 小町(現鎌倉)間10キロが全通しました。その翌年電力会社の鉄道部門に吸収されますが、昭和3(1928)年にふたたび独立し、乗合バスなども営業しました。昭和24年「江ノ島鎌倉観光」と改名、同28年4月に小田急電鉄の関係会社となりますが、同56年に社名を「江ノ島電鉄」と改名して、今日に至っています。

現在は鉄道・バス事業の他、江の島の観光事業や不動産業にも力を入れています。右の写真は、戦前に発行された、木製乗車証の表の部分です。大きさは縦7.5cm・横5.2cmです。内容については文書館収蔵資料展「観光資料万華鏡」の解説書をご参照ください。(中村)(参考：吉川文夫編著『江ノ電賛歌』大正出版、1985年・『江ノ電の100年』江ノ島電鉄、2002年)



江ノ電の木製乗車証

編集後記 今回は、「文学にあらわれた藤沢」を新たに掲載しました。文学作品であっても、藤沢の様子を記したものや人々の心象風景を描いたものは、藤沢の歩みを考える素材たりえます。ご一読いただければ幸いです。第4頁の「古文書の読み方」では、日清戦争で台湾に出征した兵士の日記をとりあげました。資料の内容に、江戸時代の古文書とは違った魅力を探っていたいただければ幸いです。ご意見などございましたら、文書館までご連絡ください。(中村)